

3 映画とのご縁、人生の喜び

水谷武生

「人生楽ありや、苦もあるさ」生きていくのがつらかった時、テレビで小津安二郎監督の『秋刀魚の味』を観た。昭和30年代の懐かしい風景、穏やかな日常、淡々と流れていく中で起きる小さな起伏、そしてまた日々が繰り返されていく。若いころ観たら何でもない退屈な映画だったろうが、この時は心底癒された。

生来の「自分が良ければ人も感動してもらえる」という悪い癖で、当時専務理事をしていた四日市諏訪商店街振興組合で映画会を企てた。平成23年四日市市文化国際課（現在は文化振興課）様が「文化の駅サテライトステーション事業」を募集していて、これに応募し採択された。幸運にも小津監督生誕100年を記念して、多くの作品がデジタルリマスター化されていた。この年、東日本大震災が起きた。呼び掛け文には「人と人との繋がりが見直される時代になった。小津監督のユーモアに散りばめられた、しみじみと感動に浸れる、そんな珠玉の作品9点を厳選した」と書いた。

映画会の始めに簡単なコメントを、終わったら感想を出し合う時間を作ろうと思った。前知識があるか無いかでは、感動の度合いが違ってくる。ところが大勢の方を前にして、なかなか喋れない。簡単に喋って早速上映に入ることが数度続

いた。また、上映が終わると帰路を急ぐ方がほとんどで、感想会も出来なかった。現在では、上映が始まる5分前にネットを探り出した映画情報を、さも知っていたかのように喋っている。感想も文章でいただきペーパーにして渡すようにした。

映画会も5年目に入り、正直なところ止めるにやめられない状況と、なっている。集まって頂くのは高齢者の方がほとんどで毎回おなじみの人が多い。カレンダーに印をつけて楽しみにしていただけでいた95歳のお婆さん、親子揃ってみえたのが、いつのまにか娘さんだけになったお爺さん。たとえ一人でも、人生の最後に楽しみを提供することが出来たことは、自分にとって何より幸せなことだと思う。

「上映作品は、どうやって選ぶんですか？」毎回、映画会のお手伝いをしていたたく、「北勢若者サポートステーション」の女性からこん



な質問をされた。会場の設営は一人ではできない。多くの方の協力が必要だし、観に来ていただく方が少なければ続けることは出来ない。協力が不可欠。だから、皆様からの希望は極力聞くようにしている。聞いて判断する。結果、自分の好みが多く反映された鑑賞会となる。こたえは「私の道楽に、皆さんが付き合ってもらってるんです」感謝の気持ちを忘れてはいけない。

昨年は映画を通して楽しい人脈が増えた。「三重映画フェスティバル実行委員会」の皆さんと「男の囲炉裏端の会」の方々である。好き者どうしが、大好きな映画のことを喋る時間は、まさに至福の時である。感謝！

